

クシシュトフ・ヴォディチコ《ヒロシマ・プロジェクション》再考

越前俊也(同志社大学)

クシシュトフ・ヴォディチコ(Krzysztof Wodiczko, 1943-)は、1996年8月、故国ポーランドの古都クラクフでビデオによる最初のパブリック・プロジェクションを行った。それは、旧市庁舎時計台の塔の壁面に、市内在住で家庭内暴力を受けている者や薬物中毒者の手の動きを投影し、彼らの独白音声を流す作品であった。以前のスライドによるパブリック・プロジェクションが、映写体となる建造物の威圧的で好戦的な本質を暴く性格を持っていたのに対し、ビデオによるプロジェクションは、地域住民や労働者の語りを流し、身振りや表情を映すことによって、建造物を弱者の代弁者に仕立てる性格を持つ。2009年、ヴェネツィア・ビエンナーレのポーランド館で発表した《ゲスト》は、その代表作例といえよう。同作は、イタリアで働く外国人労働者(ゲスト・ワーカー)の会話と身振りをビルの屋外窓拭き清掃員の姿に集約させて室内の壁に投影した作品であった。

ビデオを表現媒体としたこうした作品は、作家自身によって、以下の二つの概念によって説明されてきた。一つは、映写体となる建造物を児童心理学でいう「移行対象」と見做し、プロジェクションが行われた周囲一帯を「移行空間」と呼んでいる点である。つまり、乳幼児が自己形成の過程で特別な愛着を寄せる毛布やタオル等に、地域住民や労働者が深く関わる建造物をなぞらえている。もう一つは、彼らの語りには、「自分の意見や考えを公に向けて率直に、時には命を賭けてまで正直に述べること」が求められている点である。ここには、ミシェル・フーコーの「パレーシア」概念が適用されている。

1999年8月、原爆ドーム前で行われた《ヒロシマ・プロジェクション》も、作家によってこの二つの概念を用いて説明され、そのように理解されてきた。しかし、本作の場合、たとえ原爆ドームが「移行対象」でありえたとしても、映像はドームそのものではなく、ドームの前を流れる川の土手に投影されていた。さらには、川面に映る反射映像が重要な役割を果たしていた。本論は、この二つの事実に着目する。そして、本作は、彼の他のいかなるパブリック・プロジェクションにも増して、「イメージの物質性」を示した作品であった可能性について指摘する。次に本論は、本作がビデオの投影をもって終わっていなかった点に着目する。本作の完結は、当日、このプロジェクションを見た聴衆のインタビューを掲載したパンフレットの発行をもって果たされた。そしてそのことにこそ、作家が公にはしていないもう一つの意図が隠されている可能性を指摘する。要するに《ヒロシマ・プロジェクション》は、他のビデオ・プロジェクションのように「移行対象」や「パレーシア」として理解される以上に、その「イメージの物質性」と「聴衆のインタビュー」により語られるべき作品であることを主張する。